社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会

2009/12/1　No.52
発行者：社会福祉法人　ミッドナイトミッションのぞみ会
本　部：〒293-0023　千葉県富津市川名1436番地

ベツレヘムからの帰り道

副理事長
木下　勝世

いまから二千年前、ベツレヘムの馬小屋で生まれた赤ちゃんのもとを、羊飼いたちと東の国の占星術の学者（博士）が訪ねてきました。羊飼いと博士の訪問にまつわる話は、色々な点で異なっています。羊飼いと博士では身分が違いますし、書かれている聖書の箇所もそれぞれ別です。羊飼いは天使の知らせを聞いて、取るものもとりあえず駆けつけましたが、博士たちは星を見つけ、調べて、周到に贈りものを用意してやってきています。

このように何もかも違う羊飼いと博士なのですが、共通することが一つあります。それは、ベツレヘムからの帰り道では変えられていたということです。直前まで不安に満ちていた羊飼いたちが、ベツレヘムからの帰り道では賛美を歌いながら帰ったそうです。博士たちは夢でお告げがあったので（ヘロデのところには寄らず）別の道を通って帰ったそうです。彼らは往路では星を頼りに探し回り、人に尋ねたのですが、帰り道では行くべき道を直接神様から指示していただいたのです。

クリスマスの出来事に出会うとき、人は変えられるのです。先が見えない不安や、生きる意味を見失った虚しさが消えて、心に灯が点き賛美があふれて来ます。羊飼いのようにです。進むべき道を求めて右往左往する生き方から、行くべき道を示されて迷いなく歩みだすことになります。博士のようにです。

さらに、羊飼いが羊のところに、博士たちが東の国に帰って行ったということも、心に留めたいことです。彼らは自分たちが身を置く現実の世界に帰って行ったのです。そこは様々な問題に満ちた場です。けれども羊飼いと博士たちが知ったのは、問題に満ちたそれぞれの現実の場こそ、神様が共にいて働いてくださる場なのだということです。

「望みの門」とは、まさにこのことであります。神様は「苦悩の谷を望みの門として与え」てくださるのです。困難が集約したような苦悩の谷の現実こそ、神様が働かれて望みの門に変えてくださる場なのです。望みの門の進む道は、この約束を信じて歩み続ける道です。この道を羊飼いのように賛美しながら、博士たちのように確かな足取りで歩みたいと願います。

ゾンタークさん、ヘルデンさん有難う。

日独福祉青年交流研修スタート

常務理事　井本　義孝

イエスがなお群衆に話しておられる時、その母と兄弟たちが、話したいことがあって外に立っていた。そこである人がイエスに、「御覧なさい。母上と御兄弟たちが、お話ししたいと外に立っておられます」と言った。しかし、イエスはその人にお答えになった。「わたしの母はだれか。わたしの兄弟とはだれか。」そして弟子たちの方を指して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟・姉妹・また母である。」（マタイ12章46節から50節新共同訳）

お二人は去る十一月一日、成田空港からルフトハンザ機で帰国された。滞日二十六日間の交流であった。初めての方のために、両名が来日された経緯を簡単に記しておく。昨年七月十九日児童養護施設かずさの里にて結成された「日独子ども家庭アカデミー」と本法人共催による標記研修第一期生として来日された。それは去年九月四日に既に帰国されていたシェーア師のご尽力により人選され今回の訪日実現となったものである。お二人のことはご承知の方が多いとは思われるが、マリーさんは未だ大学一年といったところ、ＭＢＫ主催の諸行事に参加、主としてボランティア活動をしながら将来教師希望とのこと。又、ドロテさんは、三年前よりＭＢＫにて青年担当監事として、修養会活動と堅信礼の教育担当者とし働らかれており、学生時代から障害者施設等でボランティア活動の経緯もあり、社会教育学士号をもち、教育者としてのキリスト教信仰の大切さを確信しておられた。お二人は夫々、ベーテルのあるビーレフェルト市（人口約三十四万人）の近くの町のご出身であった。十月七日以来、紫苑荘ゲストルームに六日間、かずさの里に十日間、ホームステイ三日間、広島・京都への二泊三日の旅行等、かなり盛沢山で、お二人にはどのように受けとめられたか。僅かなりとも福祉や文化の現状に触れ、帰国されて今後日独双方の青年たちのよき交流のきっかけとなることが出来れば幸いである。第二次世界大戦で共に戦い、共に敗れそして〝核〟の脅威は世界を覆い、平和の大切さが切望される今日、私たちは教育や、福祉や、医療に多くの青年が魅力を感じて欲しいと願わずにはおれない。次世代を担ふ青年達が福祉の仕事に生甲斐を見出し、平和の仕事として福祉こそ天職と思へる環境を作り出すことが、今ほど切実に求められている時はなかったと感じる昨今ではある。日独の文化交流は必ずや次世代の青年たちに大きな活力となることを信じる。マリーさんとドロテさんを送り出して下さったＭＢＫのお働きに感謝すると共に、今回の企画実施に多大のご奉仕を頂いた方々に深甚の感謝を献げたい。来年八月三十日は日本から派遣する日である。

望みの門　福祉学校

「ホームヘルパー養成講習を受講中の皆さまの声」

私は現在、介護保険施設で介護員として勤務し、間もなく一年になろうとしています。知的障害者支援施設で働いたこともあります。今の介護の仕事はやり甲斐があり、とても楽しいです。しかし、介護に関する専門資格がありませんので、日々の介護業務に自分なりの限界を感じていました。

丁度その頃、新聞広告で「望みの門」のホームヘルパー養成講習の募集案内を目にしました。その時私は、なぜかとても嬉しかったです。養成講習が始まってからというもの、毎日がとても充実してきたように思います。介護という仕事に改めて魅力を感じています。

これからは、次なる目標に向けて自分自身

を鍛錬し、利用者様へより良いサービスが提供できるように更に学んでいきたいと思っています。今後ともご指導のほど、よろしくお願いいたします。

（M・S）

私が「ホームヘルパー養成講習」を受講しようと思った理由は、兄が糖尿病から目、足が不自由になりましたので、私が兄の面倒を看ようと思い受講しました。

講習初日はとても緊張しました。講師の佐野先生からは、望みの門がどうして出来たのか、という設立経緯のお話や、福祉の理念、障害者福祉のお話しを伺いました。今まで福祉の意味さえよく分からずにいましたが、講師の先生のお話しを伺い、福祉のことがよく分かるようになり、これからの講習がとても楽しみになりました。

二日目の講習は、簾先生、田尻先生の講義でした。福祉の仕事は、聞けば聞くほど大変な仕事であることがよく分かりました。これからの日本は、少子高齢社会になってくることも分かりました。その為にも、講習をしっかりと受けたいと思います。三日目は、長谷川看護室長から疾病や障害の話、人体のしくみなどのお話を伺い、内容的には段々と難しくなってきましたが、その反面、興味を感じるようにもなってきました。

これからは講義だけではなく、演習や施設実習、同行訪問などの実技も始まってきますので、頑張って学びたいと思います。

また、今受講している方々が皆とても明るく、楽しい方々ばかりです。これも、講師の諸先生方が皆優しい方ばかりだからだと思います。受講者の方々の全体的な雰囲気がとても良いですので、安心して受講できます。

さあ、今日もこれから新しい勉強が始まります。頑張って行きます。

（S・M）

東京望みの門　マナの家

「軽井沢の思い出」

生活指導員　早坂梓乃生

八月十五日～十七日二泊三日で寮生五人、職員二人で軽井沢の家へ行きました。何日も前からこの日を楽しみにしていた寮生たち。用意をする段階からテンションが高くやや心配でしたが、三日間元気に楽しみました。

軽井沢に着いてみると涼しさにびっくり。軽井沢の家は軽井沢銀座へと続く賑やかな通りから近いにも関わらず、川のせせらぎの聞こえる自然豊かで静かな場所にあります。昼間は街に出てショッピングや観光を楽しみ、夜は高原らしい空気に包まれて過ごすことのできる素敵な場所です。

アウトレットに行くことを楽しみにしていた寮生たちはあっという間に上手な買い物をして嬉しそうに見せてくれました。普段一生懸命働いている彼女たちが自分で働いて得たお給料をやりくりして自分のほしいものを手に入れた時のうれしそうな様子は見ていたこちらも笑顔になりました。

昼間は自転車を借り、各々が行きたい場所を出来るだけ回れるようにしました。あまり時間や規則に縛られることなく楽しむことができたことも彼女たちにとってとても有意義な経験になったようです。自由が多くてもきちんと寮生同志が気遣いあうことが出来ていたことも印象的でした。

ある子は軽井沢銀座を散策していた時おいしいおかき屋さんで足を止めました。「おいしそう～」と店頭で焼いていたおかきを指していました。寮長が「食べる？」と買お

うとすると「え？いいの？」と目をまん丸くして尋ねました。その時彼女たちが今までの生活で自分が望んでも叶えられない生活をどれだけ強いられてきたのだろうか、と気付かされました。本来ならば親から、周りの大人から受けることのできる愛情を受けることができなかった彼女たちは、このような小さな経験を積み重ねながら自立を目指して頑張っています。軽井沢での経験はこの寮を去っても彼女たちの大切な思い出の一ページとなってくれることでしょう。

婦人保護施設　望みの門学園

ドイツ人の研修生と共に

心理相談員　新藤　紀子

誰でも、外国の人が目の前にいると「言葉が通じないから」とその場から逃げたくなるのではないでしょうか。でも、本当に言葉ができないとお互いに理解し合えないのでしょうか。学園ではドイツからの研修生を十月八日と九日の午後に迎えました。八日は室内での折り紙と利用者さんの弾く琴の音を楽しみ、九日は学園の畑へ出て青空のもとサトイモと落花生、枝豆の収穫を体験しました。さて、みなさんは学園の利用者さんがどのように研修生とふれあったと思われるでしょうか？　わずかですが知っている英語を使って思いを伝えている利用者さんもいましたが、ほとんどの人が使った言葉は「日本語」でした。二人の研修生は全く日本語がわかりません。それでも日常的なことはよく通じていたようです。どうしてでしょうか？それは身振りや手振り、顔の表情を巧みに使っていたからです。研修生の二人は学園の利用者のみなさんに囲まれてとても楽しくツルの折り方を覚えました。ドイツでカエルの折り方を習ったばかりだったマリーさんもその折り方を披露し、参加者全員が笑顔の絶えないすばらしい午後のひと時を過ごすことができました。一方畑作業のほうでは、まず作業用の帽子のかぶり方に首をかしげていたドロテさんもそれを見てケラケラと笑うマリーさんも利用者の皆さんに混ざって泥だらけになりながらサトイモを掘り出しました。一本一本の根っこにどのくらいたくさんのサトイモがついていたことでしょう。あっという間に一輪車に山盛り一杯になりました。抜き取った落花生や枝豆は洗って一つ一つ実を摘み取りました。ここでも説明に言葉はほとんど必要ありませんでした。人がすることを見て習うというのは人が何かを学ぶことの最も基本にあることなのではないでしょうか。言葉ができないからともの おじすることなく堂々と日本語でやり取りする利用者さんを見て、なにかたくましさを感じると同時に、コミュニケーションの基本の基本を教えられたように感じました。むしろ言葉を介さないことで心と心の直接の交流ができたのではないかと思います。

養護老人ホーム　望みの門楽生園

新しいとりくみ

施設長　白鳥　正道

養護老人ホームは介護保険サービスが利用できるようになってから終の棲家としての役割も期待される施設となり、要介助者と自立者とが混在する施設となっています。現在の食堂はお元気な方だけが入所していた時代であれば十分な広さですが、車いすが増加する今、入所者全員での食堂利用は、往来も大変な状況です。

そこで、二部制にすることを目標に五月より委員により検討を重ねてきました。

許される条件の中での工夫の為、時間差を用い、同一時間での食堂の利用者絶対数を減らすことで、解決を図ることにしました。

準備段階では、入所者の健康増進、自立支援、自由選択、自己責任、協調性といったことも念頭に置き、「将来的には、バイキング形式で、温かいものをすぐ食べられるように」といった夢の広がる内容がいくつも出ました。確かに入所者にとって食事は一番の楽

しみといってもいいかもしれません。年齢層でいえば六十代から九十代まで幅広い方が入所しています。皆さんが満足とはいかないまでも多くの方に施設の食事は、環境を含めて、「おいしかった、ありがとう。」と言われるようなそんな食事を提供したいと思います。

もう一つ改善を図ったものとして、しばらく懸案でありました、地階トイレのバリアフリー化です。以前はタイル張りの段差のある車いす使用者には少々不便な構造でした。こちらは八月に全面改修し、車いすのまま出入りができ、間口も広げ自動洗浄機も付き、ご支援くださる皆様のおかげで大変明るくいい環境が整いました。心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

今後も利用者の皆さんが、安心して生活していくことができるよう一致協力して励んでまいります。

特別養護老人ホーム　望みの門紫苑荘

一年を振り返って

主任事務員　大貫　孝夫

私が望みの門紫苑荘に異動して一年が経過いたしました。初めの頃は自分に勤まるのか不安で仕方ありませんでした。しかし、施設長始め、紫苑荘職員のみなさんに支えられたおかげで紫苑荘一年目を無事迎える事ができたのだと感じます。また、このやさしさ、暖かさこそが紫苑荘の原動力となり、利用者さまへの家庭的な接し方に繋がっているのだと感じました。私も早く紫苑荘の一員として認められる様な事務員になるべく精一杯働いてゆこうと思います。

異動一年にして紫苑荘では大きなトピックが二点ほどありました。まず一つ目は増床工事。完成する前は窓が少なく、光がなかなか入らず暗いイメージがありました。しかし工事後は窓が増え、更にスペースが広がった事により利用者さまにとってとても清々しい光の当たる場所となったのではないかと思います。二つ目としてはエレベーター工事です。既存のエレベーターは役目を終え、新たに設置されました。安全性が確保され利用者さまも安心してご利用なさる事が出来ると思います。私個人的には外の風景が見えるようになった事がとてもうれしく感じました。今までのエレベーターは暗いイメージがありました。しかし、風景が見える事により明るくなり、利用者さまも一階に降りる時にはほんの数秒ですがどことなく光を感じて降りてくるのではないかと思います。

私の周りでは目まぐるしい速度で変化をしています。また、社会においてもめまぐるしく変化を感じます。石油の高騰、アメリカでのリーマンズショック、また最近では政権交代など全ての流れが早く動いているように思えます。この急激な流れに飲まれない様にして行かなくてはならないと感じます。そのためにはより一層の経験、努力、知識の向上に努めたいと思います。そして、望みの門紫苑荘という施設のように利用者へ光を与えられればよいなと思います。

老人デイサービス事業　望みの門デイサービスセンター

はじめの一歩

生活指導員　立和名康代

望みの門デイサービスセンターは、昭和四十八年四月にリハビリテーションホールと

して建設されましたホールを、平成十三年七月に改修工事を実施して通所介護事業所として歩み始めました。

日々利用して下さる利用者も増え、今では一日平均二十三人程となり地域の方々にも愛され現在に至りますが、最初の施工からは三十六年が過ぎており至る所に老朽化も見られてきましたので　利用して下さる方々が、快適で安全に過ごして頂ける様にと、この度二回目の大規模な改修工事を行う事になりました。

その工事も無事に終わりこの度　新しい一歩を踏み出すことが出来ました。

ホール内は広々と、まるでホテルにでもいるかのような気分になります。

吹き抜けになった天井は開放的で、大きな窓からは、太陽がサンサンとふりそそぎ室内に居ながら季節を体で感じることが出来ます。

増築された部分に大きなシステムキッチンが入りオーブンレンジまで備え付けられています。今まで出来なかった利用者の方と一緒に調理をするという事にもチャレンジ出来そうです。夢は広がります。

この明るく広々とした空間で日常を忘れゆったりと楽しいひとときを過ごして頂ける様スタッフ一同　笑顔で利用者をお迎えしております。

これからも、利用者の皆様が充実した癒しの時間を持てるように心を込めてサービスの向上に努めてまいりますので　お気軽に望みの門デイサービスセンターへいらして下さい。

高齢者居宅介護　望みの門在宅サービスセンター

「地域の中での自立支援」

介護支援専門員　君島　峡子

今年も最後の月になり、あっという間に過ぎていく毎日です。利用者さんのお宅を訪問させていただきながら、高齢者夫婦世帯や一人暮らし世帯の利用者さんが地域に増えていく中で、介護が必要な状態になった時や老老介護、離れて暮らす家族が定期的に介護のために訪問するなど、世帯の中だけでは解決できない状況を感じます。ご家族は介護負担が増し、どこにもぶつけることのできないストレスを背負い込んで重荷に感じられている方も少なくありません。また、利用者ご自身の体力が低下するにつれ、今まで親しく付き合っていた人との行き来が困難になり家の中で一日中話す相手もなく、限られた支援の中で暮らしておられる方が多くいらっしゃいます。そのような中で、利用者さんが地域社会において自立した生活を送ろうとされる時、公的なサービスだけでは充分ではなく、私的サービスであるご家族、友人、地域住民、ボランテイアの方々による支援が重要でそれに加え、何よりご本人が自立を目指した生活をするという思いが必要だと感じます。その為に私たちは公私のサービスを問わず、身体的支援と精神的支援のバランスを考え、介護されておられるご家族も含めてより良いケアが提供できるよう、サービス計画を作成するよう努めています。それと共に利用者さんが地域で暮らしたいという思いを持ち続けていただけるような働きかけを行っています。介護を担うご家族の思いをできるだけ尊重し気持ちの和らぐ気配りに心がけ、御家族・地域で支える在宅介護のお手伝いを今後も続けていきたいと思います。

知的障害者授産施設　望みの門新生舎

「親離れの第一歩を」

主任指導員　榎本八重子

一年の経つのは早いですね。つい先日まで「暑い暑い」とパン工房で大汗を流していたと思ったらもう師走が目の前に迫り、のぞみベーカリーではお歳暮用のクッキー作り、おりひめ倶楽部はクリスマス商品、エコクラブは冬野菜とパンジーなど、それぞれの作業部が毎日大忙しの今日この頃です。

さて、季節は冬となってしまいましたが、前号が八月であったため新生舎の恒例行事「新生舎サマーキャンプ」を掲載することができず、季節外れですが今回ご紹介する機会としたいと思います。

今年のサマーキャンプは七月三十一日から八月二日までの三日間行われました。今年の課題は昨年度から一歩前進し「ひとり一人の役割と責任」として取り組みました。十九人の参加者全員が、掃除分担や食事当番、バーベキューの準備班や体操係など、それぞれに役割を持ち、自分の責任で行動することとしました。勿論、役割以前に「自分のことは自分でする」は必然的なものですが。張り出した日程表に沿って自分からどう動けるだろうか。分からないことを自分から質問してこれるだろうかと職員としては興味津々。

A君　「次は海だから水着とタオルですね」
「お風呂の準備はどうしますか」

職員　…どうするといい？

A君　「準備しといた方がいい」

職員　…そう。偉い。

B君　「えーと、掃除分担は、掃除機だ。どうやってやんのー。」

職員　…こうやって端から順番に。

B君　「わかったぁ。こうかなー？」

職員　…いいよ。練習練習。

などなど、それぞれの役割はたくさんありましたが、気がつけば自ら積極的に取り組む利用者の姿がありました。普段の作業とは勝手が違い、自分で考えて行動を起こすのは場面の違う環境に置かれたなかでは難しいことです。朝起きたら自分で布団・シーツをたたむ。洗濯した水着を自分で干す。食器は自分で片付けるなど、職員が手本となる行動を一番最初にするだけでどの様に行動すべきかを自分で判断し行動する姿には家庭では見せない力がまだまだ充分にあると改めて確信しました。「そうせざるを得ない環境の下」というのは、くつろぎの場であり憩いの場でもある家庭では難しいことは思いますが、少しでも自分の出来ることをこの様な機会に芽生えさせていけたらと考えます。

今年初めて参加した利用者の中に、初めてのことは失敗をおそれて取り組めない人がいました。参加すること自体とても不安だったと思いますが、始まってみれば何のことはない。思いっきりはしゃいで楽しんでいる姿がありました。修了証を受け取ったあとに「来年も参加します」と笑顔で語る姿には「自分への自信」を感じます。

このように楽しい行事の中にも一人ひとりのできることや責任を持たせながら「自分でもやってみよう」という意欲を湧かせ、ちょっとした動機付けから「自分でもできる・やれる」という自信を持たせていくのが我々支援者の使命だと思います。利用者の多くが親元で毎日安心して暮らしていますが、その分、親からの自立というのはなかなか芽生えにくいものです。様々な機会を利用しながら先ずは「親離れ」する気持ちを持たせたいところです。

一体型共同生活介護事業所　グレースホーム

グレースホームの「防災」について

世話人　浅井　造

今年も秋の火災予防週間が始まりました。火災は、建物を焼失するだけではなく、人の命をも奪う最も悲惨なできごとです。

神奈川県で発生したグループホームでの火災を契機に、グループホームでの防災のあり方が論議され、また一般家庭でも火災警報器の設置が義務づけられるなど、消防法の改正も行われています。こうしたなか、グレースホームでも、各利用者の居室に火災警報器の設置を行いました。

火災を防ぐため、このようなハード面の整備の一方、グレースホームでは、主に火災を想定しての避難訓練を年四回行っています。当然のことですが、出火してから避難が完了

するまで、どれだけ迅速かつ安全に出来るかが、利用者さんの命を守ることになります。訓練を行う際は、通報や伝達の方法、避難経路の確認など、避難誘導がスムーズに行われるよう訓練をしています。実際の火災時には、健常者でもパニックになり満足に対応できないものです。まして、判断力や行動面でハンディのある利用者さんにとって、この訓練が避難経路や避難場所、世話人と一緒に避難することを体で覚えていただくため大切なものとなります。また、利用者さん同様、私達支援者にとっても、頭で理解するだけでなく、体で覚えることが大切です。各グレースホームへの伝達の仕方、他の共同生活住居への応援などの体験を積み重ね、非常時に備えています。

こういった訓練だけではなく、火事を出さないことが最も重要です。出火防止には、毎日の火元の点検や確認が基本となります。当然のことながら、世話人が退勤する際は、ガスコンロやお風呂場など、ガスの元栓が閉まっているかを確認しています。また、火の側に燃えやすい物を置かないなど、日頃の防火への意識が「防災」につながり、快適で安全な生活を提供する柱になっていると思います。

日常の中で、命の大切さを意識して生活することはあまりないと思いますが、人の命以上に大切なものはありません。今後も支援者として防災について常に心がけ、安心で安全な生活を提供できるよう、日頃の業務にあたっていきたいと思います。

地域活動支援センター　望みの門ヨカデイサービスセンター

全員そろってバーベキュー

副主任指導員　南雲いずみ

十月十六日（金）「天高き馬肥ゆる秋」まさに絶好のバーベキュー日和り。

利用者の皆さんは、朝からそわそわしています。「お肉はいっぱいある？」「ウインナーは？」「焼きおにぎりが食べたい！」と口々に話をしています。

午前中から、準備開始。タマネギの皮をむく人、ピーマンを切る人、キャベツをちぎったり野菜を準備したりするグループ、肉を食べやすいように切る人、ウインナーに切り込みを入れたり肉を準備したりするグループ。そして最後は炊きあがったご飯を「焼いて食べたい」「このままがいいなぁ」と話しながら全員でおにぎり作り。その間に順番に入浴。手の空いた人から外でテーブルのセット。キャンプ用のテーブルの周りに椅子も並べ、バーベキューコンロに炭も入り設置完了。ヨカデイサービスセンターの裏庭はあっという間にキャンプ場に変身。

焼き手は、佐野学園長。網の上に丁寧に肉と野菜を並べてジュージューとおいしそうな音と匂い。配膳はスタッフ。皆さんはお皿を片手に嬉しそうでした。アツアツのお肉や野菜を頬張りました。最後に、三日前にこの庭で掘ったさつま芋を置き火に乗せて「焼きいも」。準備から食べ始めまで、みんなで協力して行ったバーベキューの味はまた格別でした。皆さんから「おいしかったね。」「また、やろうね。」と満足そうな声が聞かれました。

ヨカデイサービスセンターをご利用くださる皆様は、体調によっては行事に参加できないこともありますが、今回は、利用者の皆さんのお一人お一人が役割を持ち、全員が参加出来たことが何よりの感謝でした。

これからも皆さんのご健康に配慮しながら、安全・安心で楽しい日中活動の支援を心がけていきたいと思います。

中核地域生活支援センター　君津ふくしネット

「開設五年の中核センター」

副主任相談支援員　横浜　敬子

君津ふくしネット専任の任命を受け、皆様のご協力の下お陰様で一年を迎える事が出来ました。

平成十六年十月に開設した中核センター・

君津ふくしネットには、「育児・介護相談」、「施設・サービスの問い合わせ」、「各種手続きについての問い合わせ」、「サークル・家族会・当事者会の紹介」、「地域ケア研究会への参加」、「断酒会への同行」、「多重債務相談」、「生活相談」、「ひきこもり・不登校相談」、「虐待、ネグレクト、ニート相談」、「就労相談」、「自殺予防見守り支援」などのご相談を頂いておりますが、五年経った現在も相談件数は増え続けています。

お顔の見えない電話相談で、切羽詰ったお言葉をお聞きし、とにかく必死でお話を伺ったものの、そのお気持ちに寄り添ってあげられていたかどうか不安な事もありました。

窓口には、可愛らしい赤ちゃんを連れた若夫婦が近況報告に来て下さったり、止むに止まれぬ事情で着の身着のまま家を出てこられて、「今夜の食料も泊まる場所もない。」と切迫した状況を訴えに来られる方もいらっしゃいました。

ご自宅を訪問させて頂く機会も増えましたが、ご高齢者にとって地域での生活は快適ではない場合もありました。国民年金の未納期間が僅かに残ってしまったばかりに、「無年金」という厳しい老後を迎え、老老介護で行き詰り、「もう限界です…。」と涙ながらに訴える方、またお身寄りの無い独居の方では、設備面、衛生面、健康面などを考えると入所施設の整った環境が恋しくもなりました。

こうして、お一人おひとりの訴えに耳を傾け、「誰もが、ありのままに、その人らしく、地域で暮らすことができる」ようお手伝いさせて頂く事を目標として参りました。

解決策が見つからず行き詰まった時や、支援の方向が見えなくなった時にも、「この仕事に正解などない。その人の身になって一生懸命に考えてあげる事。」という先輩の温かい励ましや助言を受け、今日まで頑張って来られた事に感謝します。

中核センターの一員として住み良い地域づくりを目指し、皆様のお役に立てるよう頑張りたいと思っています。これからもどうぞご指導下さいますよう宜しくお願い申し上げます。

児童養護施設　望みの門かずさの里

二〇〇九　かずさの里感謝祭

保育士　伊藤　成美

十一月三日、三回目の「かずさの里感謝祭」が行われました。今年も特別ゲストとして「みなと幼稚園鼓笛隊・天羽中学校吹奏楽部・天羽高校吹奏楽部・合唱部」を迎え、里のグラウンドにてすばらしい演奏・歌声を披露していただきました。同時に多数の方々から頂いた献品によるバザー、りんご飴等の新メニューを加えた模擬店、子どもに人気のゲームコーナーなど、どれも地域の子どもやお年寄りの方の声と熱気で大盛況でした。

感謝祭は毎年、地域に溶け込む「子どもの里」をスローガンに、地域の方々と年に一度ふれあう場として開催しています。年々足を運んでくださる方が増え、大切な交流の場になっています。この中で子どもたちが「地域で暮らしている」実感を味わってくれればなと思います。そして大人になっても地域で支え合う暮らしを忘れないでほしいと願います。

また、感謝祭はお世話になっている地域の方々に感謝の意を込めて、子どもたちと職員が一丸となって取り組む行事でもあります。準備の段階ではバザー品の整理、特に衣類品のたたみは丁寧に取り組んでくれます。普段の生活ではおろそかですが、この時は別人のようにきちんと行い少々驚きました。当日も「いらっしゃいませ」「ありがとうございます。」「それ（ラムネ）開けましょうか」と優しく明るい声があちこちから聞こえ、普段見せない子どもたちの姿がそこにありました。少しのうれしさを感じながら、来年も有意義な交流の場を作りたいと思いました。

乳児院　望みの門方舟乳児園

「新人職員としての歩みを振り返って」

児童指導員　高橋明日香

四月に開設される施設に四月から職員として働き始める、ということが決まった時にな にも分からない私が開設当時からいて足手まといにならないだろうか、今まで乳児との関わりが全くなかったのに大丈夫なのだろうかという気持ちがとても強く、仕事をするという楽しみと同じくらいの不安がありました。

働き始めてまず、開設されたばかりの施設のために備品もなくそれら一つひとつを四月に集まったばかりの職員が買いに行くことから始まりました。また、具体的な一日の流れや決まりごともなく、なにするにもやりかたは人それぞれでなにも分からない自分はどうしていけばいいのだろうと悩む事もありましたが、〝いろんな方法を試してみよう〟〝子どもが一番過ごしやすいようにしよう〟という気持ちや、なにより〝みんなで協力して一からつくりあげていこう〟という気持ち、職員の気持ちと子どもの気持ちをくみ取ってより良い環境にしたいという考えは新しい施設だからこその強みであると感じました。全く知らない人同士で一からつくりあげるということは大変なことなのではないかと不安に思っていましたが、職員同士でよく会話を交わしてコミュニケーションをとったり、どうすればよいのかをお互いで話しあったりして、今日まで楽しく仕事を進めていくことができました。

働いてなにより驚いたことが寄贈品の多さでした。たくさんの方からベビー用おもちゃやベビー服、布団やタオルなど数えきれないほどの寄贈品を送っていただきました。温かい人たちの優しさや心遣いに、新人職員の私は支え合いや助け合いの精神、隣人愛を学ばせてもらいました。人は一人では生きていけない様に、施設も周りの支えがあるからこそ成り立っていくものなのだと深く感じました。これからも子どもたちや職員、そして支えてくださる方々に感謝しながら頑張っていきたいと感じています。

編集後記

急に寒くなった。懐（フトコロ）の故ではない。〝核〟拡散のニュースである。中近東・そしてアジアの某国は原爆を貯蔵とか。平和あっての福祉である。衣食足りてホームレス多し。十一月三日の〝里〟のバザー、大盛況の感あり。魅力は安くて美味しい屋台か。残念ながらドイツ人のお二人は参加出来なかった。今号はその特集にしてもよい位、多くの記事材料があった。学園での一日がレポーターの筆力により生き生きと描かれている。間もなく本人達からの感想文が届くのが楽しみ。さて、里の雨天体操場が地域交流センターに生まれ変わる。児童の心身鍛錬の場として、地域の方々の交流の場として、このホールが用いられるのも近い。来月のクリスマス会が楽しみ。来年早々には児童虐待防止セミナーが開催される予定。主のご降誕をお祝いする日も近まった。では皆さん、良きクリスマスをどうぞお迎かへ下さい。

（Y・I）